

# 二年学年だより

No. 8

11月号

令和6年11月発行

206HR

## 『三十路の重み』

30歳のことを“三十路”とも言う。この“そじ”という語は20歳の“ふたそじ”からあるらしいのだが、“みそじ”の使用例が最も多く、“みそじ”というのは年齢の一つの山という意識が強いからなのではないかと言われているらしい。私も今年、そんな人生の大台に乗ってしまった……。高校生の時には30歳の自分なんて空想でしかなく、これほど早く訪れるとは思ってもみなかった。みなさんは30歳の自分を思い描くことができるだろうか。

高校生の頃、みなさんと同じように保健の授業でライフステージやライフイベントの学習をして、将来設計とやらを書くために想像力をフル回転させたことを覚えている。水泳人生を全うし、引退してすぐ教師になって、24歳では結婚をすると豪語していたが、水泳を頑張って引退したことくらいしか叶えられていない。人生はなかなか思いどおりにはいかないものだ。歩んできた道のりに後悔はないと言えようそになるかもしれないが、間違いではなかったと思っている。それは、これまでたくさんの出会いに恵まれ、楽しく豊かな人生を送ることができたと思えるからだ。高校生のみなさんにも、大切な人と一緒に、それぞれの形をした人生の色塗りをしてもらいたい。その色塗りの場所の一つが学校であらばと思う。

三十路を迎えた今、ありがたいことに家族が増え、仕事もプライベートも充実している。その一方で、責任という重しをさらに背負うことにもなったわけである。仕事においても生活においても、20代だからこそその「若いから」という言い訳は通用しないと感じる。みなさんの約13年後にも、人によればもっと早く、その重みを感じるのではないかと思う。人生の分岐点に立って思うことは、若いうちにしたいことを思う存分すべきだということだ。視野を広げて、たくさんのことに挑戦して、たくさんの人に出会って、楽しいことも辛いこともいっぱい経験してほしい。時には周りの人に迷惑をかけてしまうかもしれないけれど、それも経験だと思う。感謝と愛情で恩返しをしたら大丈夫だ。中央高校生には、羽ばたく力のある素敵な人に育ってほしいと願う。“三十路”とはいえ私もまだまだ若手。一緒に頑張っていきましょうね！

(206HR担任)

## 『溝にはまって思うこと』

授業でお馴染みの古代ギリシアの哲学者プラトン（前427～前347）は、事物の本質は、その事物には存在せず、人間の魂がかつて存在したイデア界にあると述べました。現代の生活を振り返ると、少しずつその世界観に近づいているかもしれません。画面から流れてくる加工された歌声やニュース、完全無欠のアイドルやSNSへのキラキラ投稿を見ると、果たして本当の姿（本質）とは一体……？と考えてしまいます。7月に行われた高校生における番組制作の全国大会では、「完全無欠の理想の存在＝推し」に熱中することへ警鐘を鳴らした作品があり、印象に残っています。完全無欠の推しに熱中するあまり、無意識に周囲を見下すようになっていたり、推しの無様な姿を見た途端、簡単に縁を切り、鞍替えする不寛容な生き方につながったりすること。社会に出ると失敗の連続です。一度の幻滅で人間関係を断ち切ってしまうと、仕事の幅も広がらないし自身が得られるものも少なくなってしまいますね。

それを防ぐためには、成長の過程で周囲の大人の「適度な幻滅」を経験することが大切とのこと。ネクタイを頭に巻いて千鳥足で帰ってくるお父さんの姿や、運動会の親子リレーで派手にこけるお父さんの姿（昔、足が速かったお父さんに多い）は、実は必要で、もしかすると「適度な幻滅」を経験させるために、ワザとしているのかも。事物の本質とは、欠点を含んだものであり、また、寛容な社会であってほしいように思います。

(206HR副担任)